拝啓、融けゆく世界へ　＃2

鳥山憂

「……は」
突如呼び出されたあげく、自分に用があったはずの黒眼帯の男――天海快晴（あまみかいせい）から、逆に「誰だ」と尋ねられた桃髪の少女。直前に彼に抱きつかんばかりの急接近をした反動か、みるみるうちに顔が赤く染まっていく。
「……ば、ばっ……」
口をわなわなさせて小声で呟く少女に、天海は声が聞こえないだけかと思ったのか、耳を近付ける。その行為が無用心であった。
「――先輩のバカ！　サイテー！　人でなし！　浮気者――！！」
「ごふっ！？」
少女の肘打ちが、明らかな殺意をもって天海の鳩尾にクリーンヒットした。腹を押さえてうずくまる天海に背を向け、少女は「ふん」と鼻を鳴らす。
「……怪我人を殴るのがご法度なのは当然ですが、見たところ天海さんの方にも非がありそうですからね」
「……はぁ？」
青縁の眼鏡をくいっと上げて呆れ顔をする神宮寺（じんぐうじ）を、不服そうに見上げる天海。まあまあ、と照（てる）がどちらの肩を持つでもなく割って入る。
「あの子、お兄ちゃんのこと知ってそうな口ぶりだったよね。どこかで会ったことないの？」
「……さあ。少なくとも俺は知らん」
ゴッ。
今度はどこかのベッドから拾ったであろう枕が、天海の顔面めがけて飛んできた。
「……本当に、覚えてないわけ……？」
少女は握り拳を震わせ、歯を食いしばりながらそう問いかけた。
「……お兄ちゃん、ここは嘘でも覚えてるって言わないと命が危なそうだよ……」
照が耳打ちしたので、天海は頷いてその通りに答えた。
「覚えてる」
ドゴッ。
とうとう顔面へのストレートパンチが入り、天海は無抵抗のままベッドへ倒れ込んだ。
「絶っっっ対、嘘じゃないですか！！」
あちゃー、と照は額を押さえた。彼が気の利いた嘘などつけないことを、すっかり考慮に入れ忘れていたのだ。

＊　＊　＊

「……なるほど。研修生時代の傘剣術（さんけんじゅつ）の講師が天海で、実戦課題で世話になったと」

少女は日暮凪沙（ひぐれなぎさ）と名乗り、気恥しそうに天海との馴れ初め話の要点だけを簡潔に述べた。それを神宮寺がさらに要約して、期間にして約一年半の出来事はたった一行に圧縮されてしまった。

「そうです。それだけです」

「……それだけにしては、随分と馴れ馴れしかった気もするけど――」

照がぼそっと呟き、それに従って神宮寺が冷たい視線を天海へ向ける。

「……お前が何を想像しているか知らないが、俺は本当に何も知らんからな。確かに今の話で彼女のことは思い出したが、ただの講師と研修生というだけの関係だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「そ、そうよ！　彼もそう言ってるじゃない！」

なぜか必死の形相で天海に同調する凪沙。天海の後輩、ということで神宮寺と天海はもちろん年上で、照とも同年代か、凪沙のほうが背は低いので下手すると年下にも見えるのだが、どうやら興奮すると敬語が外れてしまうらしい。

「……まあ、別にそういう関係性を持つことが悪いわけじゃないですし。節度は弁えてほしいですけど……とはいえ、天海さんならその点に関しては問題なさそうですが」

「だから何の話だ」

あはは、と照は苦笑いで相槌を打つ。しらばっくれているわけではなく、本当に神宮寺の言い分にピンときていない顔だと、彼女は読み取った。

「そういえば、元々紹介してくれる予定だったってことは、日暮さんも『調停士部（ちょうていし）』に所属することになる、ってことですか？」

「さすが照さん、話が早い」

神宮寺は頷き、改めて自己紹介するよう凪沙に促す。凪沙は一つ咳払いをして、天海兄妹の前へ（若干妹寄りに）向き直る。

「……日暮凪沙。対《Anti.》天災《Catastrophe.》国際《International.》防衛省《Defense.》トウキョウ支部、調停士部にメカニックとして配属になりました。……これから、よろしくお願いします」

やや尻すぼみになりながらも、凪沙は改まってそう名乗った。

A.C.I.D.（アシッド）……正式名称を対天災国際防衛省（ACID）というこの国際組織は、ここ数十年のうちに相次いで起こっている大規模天災の様態を受け、被害を最小限に抑えるために発足した。

表向きには「温暖化による異常気象」と説明されている天災の数々だが、実はそれらは「天魔（てんま）」と呼ばれる異形の怪物が、激しい災害を引き起こす雲――「災雲（さいうん）」を発生させることにより起きている。「調停士（ちょうていし）」とは、その「天魔」に対抗可能な手段を得た、いわば天魔を狩るハンターのような人々のことである。

三十年前の世界的な大天災を皮切りに、世界各地で異常気象が活発に目撃されるようになり、降る雨の九七％は強い酸性を持った雨と化し、生物や物質を蝕む脅威となってしまった。人知れず有害な雨から人々と平穏な生活を守っているのが、彼ら調停士というわけである。

「整備士（メカニック）か。珍しいな」

常時リアクションの薄かった天海も、少しだけ眉を上げて驚いたような様子を見せる。その隣の照も、同調してこくこくと頷く。

「彼女には戦闘にも加わってもらいますが、主には調停士部の装備や機械のメンテナンス、改良等を行ってもらう予定です。どこかの誰かさんみたいに無茶をして装備を壊されても、とりあえずは外部に出さず処置が行えるはずです」

「そうか。助かるな」

神宮寺の刺々しい物言いを無視しているのか気付かないでいるのか、天海は平然とそう返す。

「正式配属は来月の頭……一週間ほど後になりますが、ちょうど事前研修期間だったもので、お呼びできたんです」

「そっか、同じ調停士部の女の子が増えて嬉しいな。私は天海照（てる）、快晴お兄ちゃんの妹で、一応調停士補佐……ってことになってる、はずです」

よろしくお願いします、と照は礼儀正しく頭を下げる。凪沙のほうも軽く会釈して、小声で「……よろしく」と人見知りの子供のように言った。

「……改めて、調停士の天海快晴だ。今後ともよろしく頼む」

対して兄のほうは、頭を下げたのか首を上下させたのか分からない程度の一礼をする。凪沙のほうでも言葉を返すことなく、頷いたのか目線を上下させたのか分からない程度の会釈だけで応える。

「私は……ご存知でしょうけど、改めて。調停士部補佐官、兼A.C.I.D.トウキョウ統括支部副隊長、神宮寺陸斗（じんぐうじりくと）です」
神宮寺は四人の中で最年長者かつ最高権力者という立場を思わせるような、謙虚だが堂々とした「大人」の一礼を見せた。凪沙ももちろん知ってはいたのだろうが、釣られてか三人の中では一番深く頭を下げた。
「……そういえば天海さん、あなたが探していた桃髪の女性というのは、結局は人違いだったんですよね。その、天海さんが探している人物について、もう少し詳しく聞いても大丈夫ですか」
天海が神宮寺に「桃髪の女性」について聞いたとき、彼はそれ以上の質問もせず、真っ先に凪沙を連れてきた。ということは、施設の関係者で――少なくとも神宮寺の知っている範囲では――桃髪の女性、というのは凪沙以外にいないのだろう。髪を染めること自体はごく普通とはいえ、桃髪の人物は一般的に珍しく、「桃髪の女性」と言われて彼が疑いもせず凪沙を連れてきたのは、何らおかしいことではなかった。
普段は任務と妹のことしか考えていないような天海が、個人に興味を持ち人探しをしているという状況は、神宮寺の目にはかなり特異に映っていた。尋問というよりは単純に興味から彼はそう尋ねたのだが、天海はしばし考える素振りを見せ、
「……神宮寺」
「はい」
天海はわずかに躊躇したが、すぐに何ともないように表情を繕い直し、彼の目を真剣に見つめて言った。
「お手洗いに行きたい」
「はい？」
照と凪沙が吹き出したのも気にせず、天海はいたって真剣そのものといった顔を崩さず続ける。
「だから、手洗いに席を立ちたいと言ってるんだ。神宮寺に付いてきてもらいたい」
神宮寺も困惑を隠せずにいたものの、彼の目が必死に何かを訴えかけているように感じられ、ここは黙って従うことにした。
「……わかりました、天海さん、今は要介護者ですもんね。付き合います」
すぐ戻る、と二人の少女に向けて言うと、天海は神宮寺の肩を借りながら部屋を出ていった。
「……お兄ちゃん達、行っちゃいましたね」
医務室には互いに初対面どうしの二人だけが残り、凪沙は居心地の悪さを感じていた。
「……本当にお手洗いなのかしら。なんだか逃げるように出て行ったようにも見えたけど――」

「まあ、お兄ちゃんは昔から、突拍子もなく何か言い出すことも多かったので。あまり気にしなくてもいいと思いますよ」
　照がフォローになっているのかいないのか分からない言葉を投げたことで、話題はそこで途切れる。しかし二人の間には微妙な沈黙が漂っており、照はそんな空気を取り持つように、再び凪沙に声をかける。
「それで、日暮さん」
「凪沙、でいいわよ。歳も同じくらいでしょうし」
　凪沙のほうからそう提案されたことに若干驚きつつ、照は微笑んで頷く。
「じゃあ凪沙さん。お兄ちゃんのこと、好きなんですか」
　びく、と凪沙の肩が震え、耳がぽっと赤くなる。
「ばっ、馬鹿じゃないの、そんなわけないでしょ！」
「ふふ、安心してください。お兄ちゃんには言いませんから」
「そういう問題じゃないわよ！」
　つんと口を尖らせる凪沙。しかし照にとってみれば、彼女の態度が自身の論を裏付ける証拠になったようなものだった。ふふ、と微笑みを浮かべて、照は彼女に告げた。
「振り向いてくれるといいですね、お兄ちゃん」
　だが凪沙も、この少女の笑みに込められた余裕に気付かないほど鈍くはなかった。
「……なに、宣戦布告ってこと？」
「まさか。女の子同士、仲良くしましょうね」
　表向き敵対心を見せているわけではないが、兄が凪沙に振り向くことなど有り得ないだろう、とでも言うような言外の雰囲気を、凪沙は感じ取った。きっと女同士にしか分からないであろう、見えない火花が静かに散りだした。
「……それで、ご用件は何です？」
　医務室からしばらく離れた、もちろんトイレとは真反対の開けた場所へ出ると、神宮寺は天海をベンチに座らせて切り出した。
「さすが、話が早いな」
「貴方が自分から、私に手を貸してほしいと言うとは思えなかったので。もう少し言葉を選ばないと、日暮さんはともかく、照さんにはバレてしまうかもしれませんよ」
　そう突っ込まれた天海は、驚いたように目を少しばかり開き、気落ちした調子で呟く。「……そうか。我ながら、うまく誤魔化せたと思ったんだが」
「何年の付き合いだと思ってるんですか」神宮寺はぴしやりと言い放つが、それから少しだけ声の調子を和らげる。
「……まあ、足を怪我している状況で妹さんに気を遣わせず退出するには、それなりに理に適った言い訳だった

とは思いますがね。その点は、良かったんじゃないですか」
「本当か！？」
勢いよく顔を上げた天海は、直接、自分の行動を省みて恥じたのか、目を逸らして咳払いした。
「……そのことは別にいいだろう？　本題に移らないか」
「どっちから言い出したんですか、全く……」
神宮寺は呆れつつも、わざわざ二人から離れた場所に自分を連れてきたということは、何か重大な要件――少なくとも、妹や新人の前では話したくないことなのだろうと、少しばかり警戒の色を強めた。
「分かっているとは思うが……話は、俺が探していた、桃髪の女のことだ」
神宮寺が深く頷いたのを見て、天海は安心した様子で話を始める。
「丁度、さっき天魔との戦いが終わって、神宮寺がこっちへ向かってきていた、その間の出来事だった。体を休めようと、木の陰に座り込もうとしたとき、あの女が視線の先にいて、目が合ったんだ」
「待ってください、異常雲域（いじょううんいき）の、あんな中心部に近い場所に人がいたんですか」
神宮寺は早速動揺を見せる。異常雲域、というのは天魔が作り出した災雲の広がる範囲のことで、大抵は中心部――雲域の「主」である天魔のいる場所――へ近付けば近付くほど、酸性雨や暴風は激しくなる。数メートル先すら見通せない視界、巨木の幹でさえ折って飛ばしてしまいかねない暴風、そして何より……数分も晒されれば皮膚が融けてしまう酸性雨の中で、調停士でもない一般人が無事でいられるとは思えない。
「少なくとも戦闘前までは、周囲に生命体の反応はなかったはずなんだが。Tel（テル）もそう言っていた」
そう言って、天海はポケットから自身の自律型ＡＩ搭載通信デバイス――Tell-Tel（テルテル）を取り出す。てるてる坊主、という古来よりこの国に伝わる民俗風習のまじないをモチーフにした、調停士用の通信機器である。災雲の発生、つまり天魔の発生源を探知することができ、また神宮寺のような調停士補佐官は互いの Tell-Tel を通じて連絡やナビゲーションを行う。ふよふよと浮遊する天海の Tell-Tel は、ぱっと見たところ異常を起こしているわけではなさそうだった。
「その女は、古い詩を詠むように何か言っていたんだが……突然のことで、正確には覚えていない。ただ、言葉の意味はおそらく、はっきり理解できた」
それから、天海は自身でもあまり口にしたくないような苦々しい表情で、しかしはっきりと告げた。

「……第三次世界大天災（サード・テンペスト）が、遠からず来る」
「――！」

三十年前、突如として世界各地で大きな天災が立て続けに起き、人や人工物を融かすような雨が降り始めた。後に「第一次世界大天災（ファースト・テンペスト）」と呼ばれたこの災禍は、人類社会に大きな爪痕を遺した。数年後に対天災組織としてA.C.I.D.が発足し、この世界的天災の原因が「天魔」と名付けられた怪物であることが判明した。

その二十年後、今から十年前に起こったのが、第二次世界大天災（セカンド・テンペスト）だった。二十年前の反省やA.C.I.D.の対処活動もあり第一次ほどの大きな被害は受けなかったものの、それでも第一次・第二次を合わせると、世界人口の約四割にも上る人々が亡くなったとされている。

そして、女が告げた第三次世界大天災の予言。第二次の発生から僅か十年しか経っておらず、未だ復興途中にある地域も、やっと日常が戻りつつある地域も、復興のめどすら立っていない地域もある。事実であれば、黙っておくことはできない事態だった。

「……なるほど、それで例の――桃髪の女性が何者なのか、知りたかったわけですか」

天海は頷く。「もちろん、ただの悪戯か、預言者気取りの迷惑な人間かもしれないが……」

そこで彼は一言置いて、これはあくまで俺の所感だが、と付け加えてから言った。

「あの女、何か只者ではないような気配を感じた。……いや、正確には、何も感じなかったんだが」

「……どういう意味です？」

矛盾した物言いをする天海に、訝しげな目を向ける神宮寺。

「言葉の通りだ、気配を感じなかったんだよ。聴覚を研ぎ澄ませても、足音も何も聞こえなかった」

そう言って、天海は左目の眼帯を触りながら右目を伏せる。

彼は十年前の第二次世界大天災で、左目に深い傷を負ったために視力を失っている。それから調停士になるための訓練で、視力が不足している分を、聴覚などの他の五感で代用し、問題なく任務に携われるだけの力を得ていた。そのため、第三者の気配を感ずることについては、人一倍敏感であった。

「……少なくとも、ただの人ではなかったと」

「俺はそう思ったというだけだ」

天海は今でこそ冷静を装ってはいるが、自身を含めた家族が第二次世界大天災で被災した身である以上、天災

および天魔は自らの仇である。その予言を受け取ったときの動揺も、おそらく並大抵ではなかっただろう。状況を考えると、彼が気配を感じられなかったのも、必ずしも女に起因するとは言えない。
　とはいえ、そもそも暴風雨域に入り、そんな予言を彼に告げた時点で、まともな人間ではなさそうだという意見は、二人の間で共通していた。
「なるほど。ひとまずこちらでも、その不審な女性について調べてみます。分かったことがあれば、随時共有します」
「ああ、よろしく頼む」
　トウキョウ支部副隊長、という神宮寺の肩書きを活用すれば、A.C.I.D.組織内の人間であれば簡単な素性は明かすことができる。もし組織内にその女性がいれば、しらみ潰しに探れば見つけることは理論的には可能なはずだった。
「――とは言ったものの、組織内にその人がいる可能性は低いでしょうね」
「どうしてだ？」
「単純なことです。もし第三次世界大天災が近いうちに起こる、という情報を入手した者がいたとして、天海さんのような一般組織員にそれを洩らすことは考えにくい。伝達するとすればまず上部からでしょうし、不用意に情報が拡散すればパニックにもなりかねません」
　女が天海を選んで彼の前に現れたのか、それとも無作為に片っ端から調停士に声をかけて回っているのか、今の時点では分からない。しかし、少なくとも組織のルールに従っている構成員であれば、そのような行動はしないのは確かだ。
「もし組織内にいたとすれば、……内部から、組織を崩壊させようと目論んでいる人物ではないかと」
　神宮寺は鋭く目を光らせてそう告げる。つまりは、裏切り者。
「……まあ、もしいたら、の話ですけどね。あまり憶測で話すのも良くないですし、この辺りにしておきましょうか」
　けろっと声色を変えて、普段通りのトーンで話し出す神宮寺。長い付き合いとはいえ、常に一本調子なところのある天海は、時折彼がこうやって顔を使い分けるのを見ると背筋が冷たくなるのだった。
「話してくれてありがとうございます。それと、あの二人のいる場で話さなかったことも、感謝します」
「……照を不安がらせてしまうのは、良くないと思ったからな」
　照は天海にとってあの災禍の後に唯一残った肉親であり、そのためか少々過保護になってしまう面もあった。とはいえ彼らの境遇を思うと仕方ない部分もあり、何より兄が十分すぎるほど照を気に掛けて守っている状態は、

神宮寺を含めた組織の上層部にとって都合が良かった。神宮寺にとっては兄妹愛を利用しているようで罪悪感を覚えないわけではなかったが、現状互いの思惑に不都合は生じていないので、現状に甘んじているといったところだった。

「それじゃあ、あまり彼女たちを待たせても悪いですし、戻りましょうか……あ」

歩き出そうとした神宮寺がすぐに足を止めたので、何事かと天海は彼の顔を見上げる。

「……天海さん、本当に日暮さんのこと、何も覚えてなかったんですか？」

「言っただろう、彼女本人の話で多少は思い出したが、ほとんど覚えていない。傘剣術の講師として教えたのも、彼女以外にも何十人といたからな」

無実の罪をこれ以上追求するな、と言わんばかりにうんざりした表情で、天海は答える。そもそも彼は同じ調停士部の仲間でさえ全員を覚えているかは怪しいほど、対人に関するキャパシティは極端に低かった。彼の能力を鑑みれば、数年前に担当した教え子ひとりの存在など、逆に覚えていたというほうが驚きである。

「そういう神宮寺だって、教え子の一人ひとり、ちゃんと思い出せるわけじゃないだろう。それと同じだ」

「少なくとも貴方よりは覚えている自信はありますけどね」

そう言いながら、神宮寺は凪沙が彼に見せた態度を思い返し、考えていた。本当に二人の間に「講師と教え子」以外の関係が全くなかったとしたら、あそこまでかつての講師を慕い、嬉しそうな表情を見せるだろうか。調停士訓練には傘剣術以外にも、光線銃（ブラスター）や体術の訓練も含まれており、特に凪沙は光線銃の成績がその年の訓練生内では突出していた。反対に傘剣術訓練の成績自体はさほど芳しくなく、また誤解を恐れずに言うなら、講師としての天海に凪沙のような生徒に好かれる要素があるとは彼には思えなかった。

もちろん彼女が天海を好いていたからといって、何か問題があるわけではない。ただ神宮寺は幼い頃から天海を知る身として、そして人並みの野次馬精神から、彼女が彼に好意を持つに至った経緯を知りたいと思ったのだ。

「話はそれだけか？　終わったならさっさと戻るぞ」

「私の手を借りないとロクに歩けない自分の立場を理解したほうがよろしいのでは？」

小言を言いつつも神宮寺は天海に肩を貸し、もと来た道をゆっくりと戻る。

謎は謎のままだが、彼らのやることは変わらない。雨に苦しむ人々を減らすため、天魔を狩る。彼らにできることはそのくらいだった。

＊　＊　＊

「……研修が三ヶ月で、配属が三月なのは、ちょっと変わってるなーと思ったのよ」
　六月。正式にトウキョウ支部のメンバーとして配属になった日暮凪沙が、虚ろな目で呟く。
「ほら、だいたいの企業って配属は四月からでしょ？　まあ確かに一般人には秘匿されてるし、世間と少しズレていてもおかしくないと思って」
　施設内の休憩室には、彼女を含めた整備士（メカニック）が数名と、一服休憩中の神宮寺が居合わせていた。先月と比べると、皆明らかに疲れ切った顔をしている。
「……世間の繁忙期と我々の繁忙期は異なるという点では、ズレているとは言えますね」
　神宮寺が煙を吐いた息なのか、溜め息なのか分からない息をついて言う。
「あーもう！　なんで正式配属になって早々、死ぬほど働かされなきゃいけないのよ！！」
　彼女たち整備士の仕事は、調停士らの装備を改修することが主になる。いくら怪物が相手とはいえ、調停士用の装備は雨具そのものの見た目とは裏腹に頑丈で、酸にも強くできているため、そこまで頻繁に持ち込まれるわけではない。
　しかし、調停士たちにとっての繁忙期――すなわち梅雨に限っては、そうもいかなかった。
　そもそもの雨害の発生件数がピークを迎えるこの月は、調停士側としても最も仕事量が増え、場合によっては連戦を強いられることになる。それに伴い、装備の修繕や救護の件数も比例して多くなり、彼らは一年早々に山場どころか正念場を迎えるのだ。
「そうは言っても、相手は超自然ですから。人間の都合なんて聞き入れてくれませんよ」
　もう何十年もこの地獄を経験してきた神宮寺は、諦めの境地に到達した目で凪沙を宥める。
「こんなブラック組織、早々に辞めてやる」と恨めしげに凪沙が呟いた、その時だった。
　唐突に、神宮寺のジャケットが小刻みに震えだした。はっとしてポケットに入っていたTell-Telを取り出し、応答する。
「はい、神宮寺です」
『こちら天海。聞こえるか』
　デバイスのスピーカーから、天海快晴の音声が流れてくる。声の調子こそ普段と変わらないが、一転して緊迫した空気が張りつめる。
「はい。どうかしましたか」
『俺は問題ないんだが、部隊に一人負傷者が出た。救護

要請を頼む』
「了解。……本件は、別にあるんですよね」
救護要請を出すだけなら、わざわざ神宮寺に連絡を入れずとも、救護班に連絡すればいい話だ。彼に通信を繋いだということは、作戦全体に関わる要請があるのではと彼は睨んだ。
『ああ』短く返事をして、天海は要求を告げる。
『日暮を、こちらへ向かわせてくれないか』
「――えっ」

《次号へ続く》